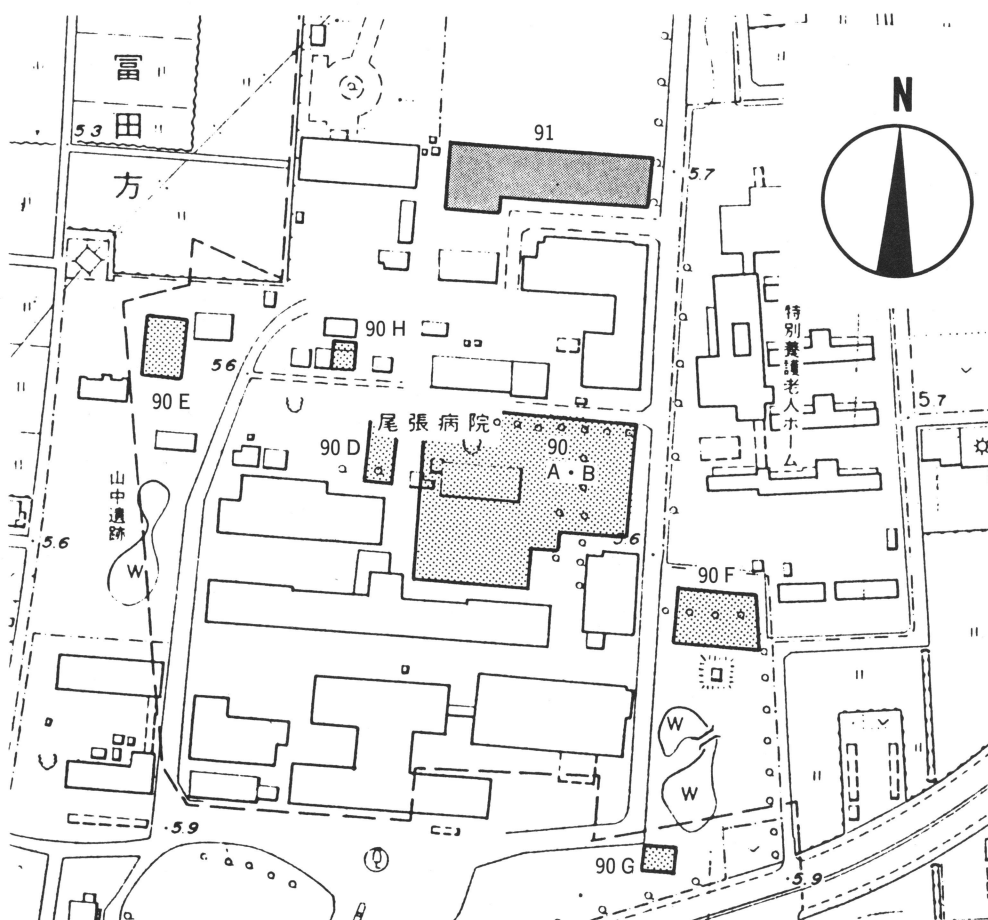


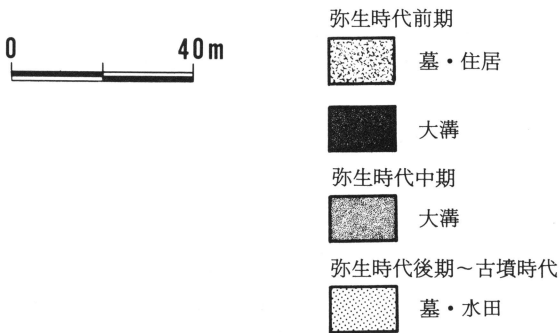
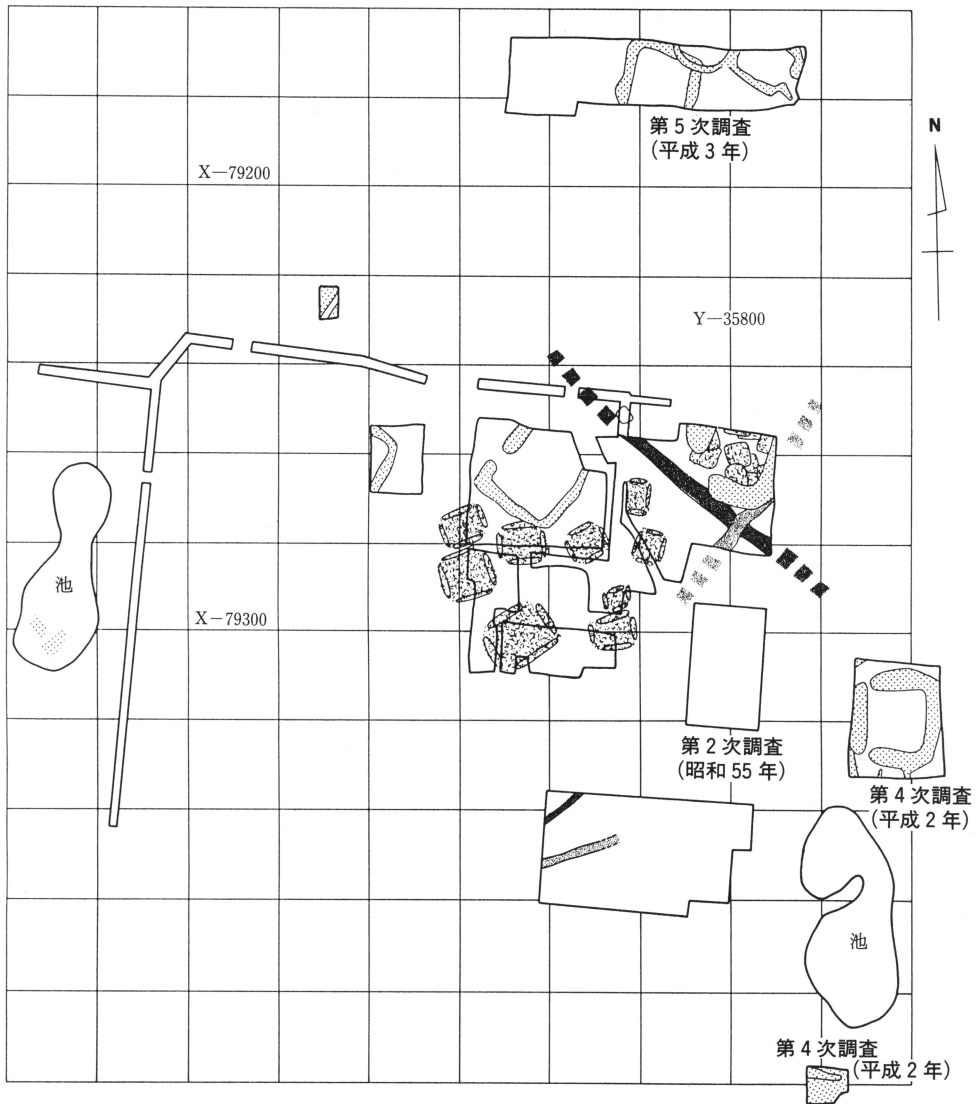
やま なか 山中遺跡

調査の経過

濃尾平野のほぼ中央に位置する一宮市は、犬山扇状地の扇端部でもあることから、伏流水が湧き出す水の町として、古くから多くの産業と文化を育んできた。そして市域西方に位置する萩原町周辺では、木曽川により形成された自然堤防がよく発達し、北から山中遺跡・南木戸遺跡・苗代遺跡・二夕子遺跡・河田遺跡と、弥生時代から古墳時代にかけての遺跡が密集している。なかでも、山中遺跡は弥生時代後期の標式遺跡として著名であり、その発見は昭和34年に遡る。県立尾張病院建築、改築に伴い昭和34年に第一次調査、昭和55年に第二次調査、続く昭和56年に第三次調査が行われ、縄文時代晩期から弥生時代全般にわたる遺構・遺物が検出されている。



第1図 調査区位置図 1 : 2500



第2図 主要遺構配置図

昨年度、県立尾張病院の改築に伴い、第四次調査を実施した。調査の結果、竪穴住居・方形周溝墓・水田などをはじめとする縄文時代晩期から古墳時代初頭にかけての遺構・遺物を良好な状態で検出することができた。特に弥生時代前期にまで遡る方形周溝墓の発見は特筆すべきものである。

今回、県立尾張看護専門学校の増築に伴い第五次の発掘調査実施されることになった。調査面積は1,300㎡である。

(小塚俊夫)

調査の概要

本年度の調査では、①弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての方形周溝墓3基(うち1基は前方後方形周溝墓)、②古墳時代後期の円墳1基、③古代の溝、④中世村落の北西端と墓域が検出された。このうち、①の「前方後方形周溝墓」(S Z 03)の検出が注目される。① S Z 03は南溝と北溝の一部を検出した。周溝のつくる平面形は、後方が東西方向が長い五角形をなし、五角形の頂部1.5mを残して周溝は途切れて開口部をつくっている。南北の溝はそれぞれ外側に折れ「ハ」字状に開いて張り出し部(前方部)を形成している。平面形はやや不整形だが、いわゆる「前方後方形周溝墓」に含まれるものとする。主体部は東辺寄りに1基検出した。供献土器は南溝から壺が大形1個、小形3個出土した。時期は弥生時代後期末から古墳時代初頭と推定される。昨年度の調査でも周溝をつくり替えた古墳時代前期の前方後方形周溝墓が検出されていたが、今回はそれより時期が遡る資料となる。

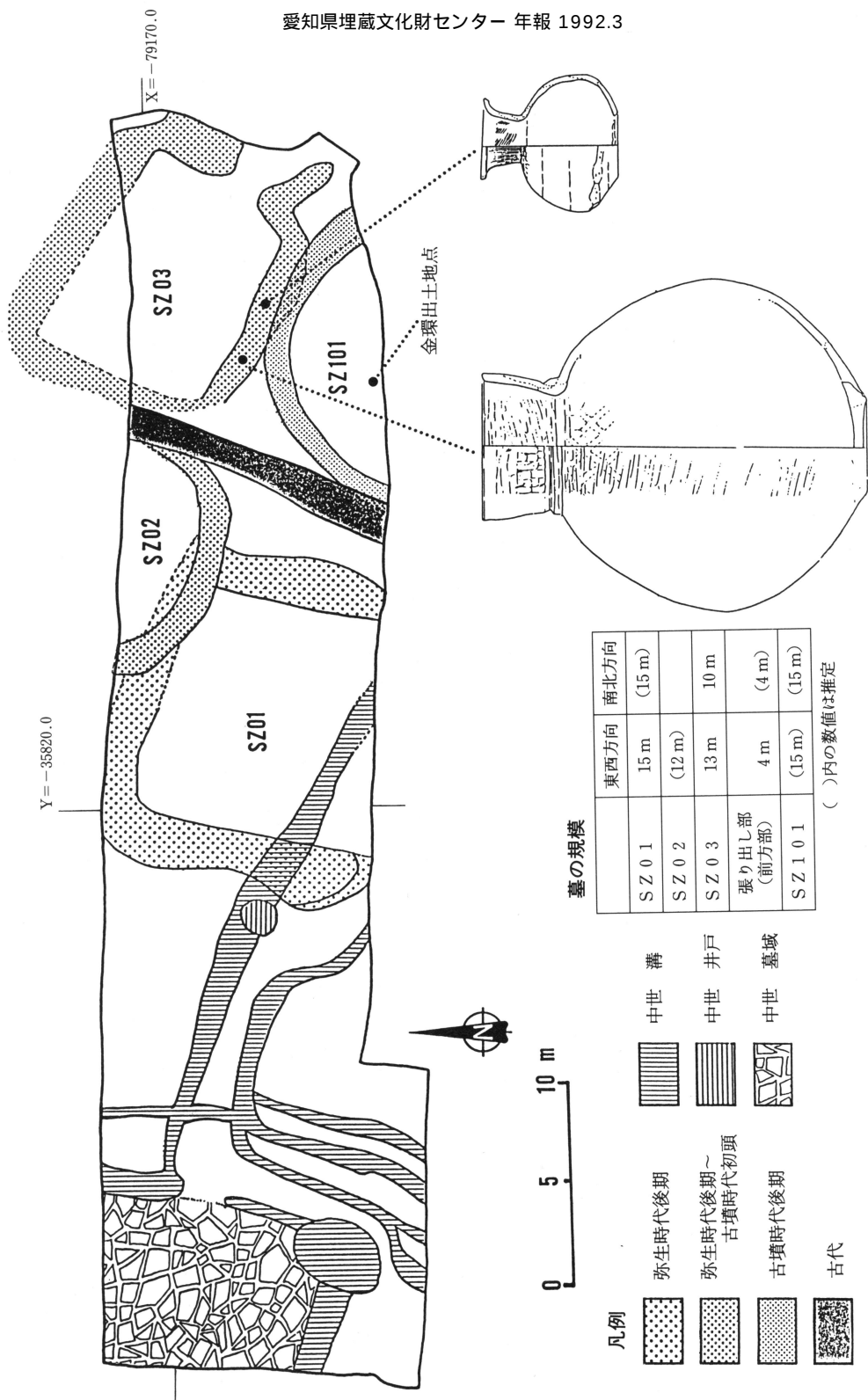
方形周溝墓3基のうち一番古い弥生時代後期中ごろのS Z 01は調査区内において東西の溝と北溝の一部が検出されたが、南溝は調査区外にある。溝の外縁は膨らむなどして不定形だが、内側は直線的で方形になっている。おそらく南に2ヶ所の土橋をもつと推測される。遺体を葬った主体部は不明。供献土器など遺物はほとんど出土していない。



発掘区東部



S Z 03供献土器



第3図 山中遺跡主要遺構配置図

S Z 02はS Z 01の北端の一部に重複して周溝が掘削されている。全体の3分の1程度の検出にとどまった。周溝はゆるく曲線を描きながら巡っており、内側も曲線的でS Z 01のようにはなっていない。S Z 01の周溝がかなり埋没してから溝が掘削されていること、平面形が方形でなく円形に近いことから、時期的には新しくなるものと推測される。周溝からは土器と鉄製品が出土した。

②S Z 1 01は6世紀代の円墳の周溝部分を検出したものである。昨年度も同時期の須恵器を出土したがその由来は不明であった。今回それが古墳に伴うものであることが判明したとともに、他にもまだ存在している可能性が高いものとなった。遺物としては、直接古墳に伴ってはいなかったが、周溝のつくる円弧の内側（墳丘側）の地山直上から金メッキの耳飾り（金環）が1点出土した。副葬品であったかもしれない。

③古代の溝は9世紀前半に属する。性格は不明。

④中世の遺構としては、調査区西部で検出したア：平行して走る複数の溝、イ：大きな長楕円形の土坑とそれに直交する溝などがある。

ア．鍵状に屈折しながら平行している西に走る溝は通路の側溝と推測される。南側溝は南北方向に平行して走る細い溝を3条分岐させている（うち中央1条は調査区を南北に横断している）が、これらは同時期ではなくつくり替え（拡張）によるものである。そして東西方向の溝にくらべて南北方向の溝の規模が小さいのは、それらが柵の根固めをするための溝であって、おそらく以南が集落内部である。北側溝は北へL字状に折れるが、これより以北には畝溝状の部分もあるので耕作地（畠）であった可能性が高い。

イ．大きな長楕円形の土坑とそれに直交する溝は上部が再掘削されて、北へL字状に折れる溝が設けられている。この溝は北側溝が北へ折れた部分と軸線を一致させており、アの通路部分では途切れて出入りを行うことができる「区画」をつくっている。溝に堆積した灰色粘土からは完全な形をした皿や骨片、炭などが出土した。骨片は火葬人骨片と推測される。この区画北部には埋土の断面が斑状をなす長方形の土坑が二つあり、これも墓（土坑墓）と考えられることから、L字状溝より北西の区域は墓域であった可能性が高い。

以上、通路を挟んで南北に集落と耕作地、その西に墓地という、村落景観の一端を明らかにしたといえよう。

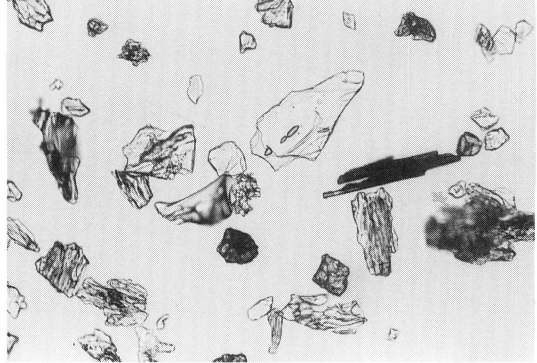
（石黒立人）

山中遺跡の層序

人の生活の場として山中遺跡の形成過程を地質学的な見地から検討するため、トレンチにより地下層序の確認を行った。（第4図）これにより確認できたのは、約5.5m分（+0.5mまで）の範囲である。地層を構成する砂層、シルト層などの堆積物の堆積環境の解明は今後の研究課題となるが、今回、+1.07m付近の暗褐色腐植質シルト中より火山灰層が発

見されたので、ここに紹介しておく。

この火山灰層は、厚さ最大1.5cmの桃色がかった灰白色の細粒ガラス質火山灰層で含まれる火山ガラスの形状は、吉川（1976）のTb型が多い。層位的には、森ほか（1990）の松河戸火山灰層（MT）に対比される可能性が極めて高い。松河戸火山灰層（MT）は、三瓶・太平山火山灰層を含む山陰に起源をも



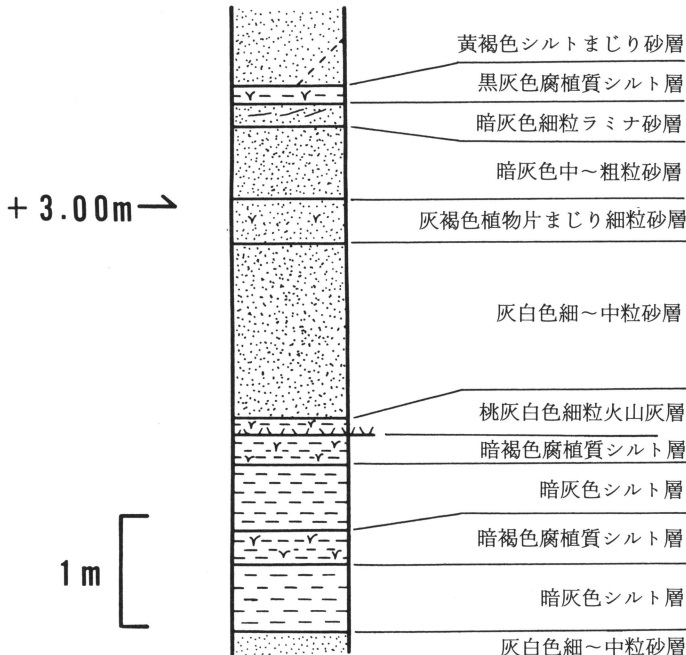
火山灰の顕微鏡写真（×60）

つ火山灰層との対比が有力視され、その降灰年代は3120年前、縄文時代後・晩期の境界付近に位置するとされている。これにより、古くから知られている広域テフラの始良Tn火山灰層（AT）、鬼界アカホヤ火山灰層（K-Ah）などとあわせてより正確な時間軸を設定する鍵層として注目されよう。特に、尾張低湿地での発見は今回が初めてであるが、これを機に、各地での発掘調査、ボーリング調査などの際に確認されれば同一時間軸を使った考古学的考察、地質学的考察に有効な火山灰層となり得よう。（服部俊之）

引用文献

吉川周作1976 大阪層群の火山灰層について。（地質学雑誌82,497-515.）

森 勇一・伊藤隆彦・宮田英嗣1990 愛知県町田・松河戸遺跡から発見された縄文時代後・晩期の境界付近に位置する火山灰層について。（『第四紀研究』29,17-23.）



第4図 山中遺跡の地質柱状図